

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.120
2010/6/1



発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL:03-3423-0185 FAX:03-3402-3218
郵便振替：00120-9-359506 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp ホームページ：http://www.1jca.apc.org/iken30
*隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円 グリーン会員の方は年1000円

藤川武男 「あじさい」

（無言館所蔵 作者の経歴は33ページ）



武男は絵だけではなく、絵本や図案、歌作にも才をしめした。美校を卒業後、講談社でデザインや挿し絵を担当、そして結婚……。妻・フクの手をかりて雑誌「手芸と洋裁」を刊行、歌集『漢音』を上梓した頃が、武男の最も充実した青春の日々ではなかったか。しかし、結婚の翌年に長女が生まれ、まもなく出征、その三カ月後には長男が誕生する。

「赤ん坊は丈夫に育っているか。どうかしっかりした子になるように」フクへの手紙に子への思いがこぼれている。それはなかった。昭和二十年秋、すでに戦争が終わったことを知りながら武男は死んだ。

（窪島誠一郎『無言館の詩 戦没画学生「祈りの絵」第三集』講談社より）

市民の意見 120号 目次

○巻頭詩 「最後に」

榊美智子 2

○特集1 日米安保を問い直す

沖繩の心を国民の意思に

伊藤千尋 3

基地の町 立川・砂川から見た安保

加藤克子 6

○特集2 市民と政治と鳩山政権

政治参加の（間接妨害）をなくそう

栗田隆子 8

地方政治の現場から見た鳩山政権

須黒奈緒 10

○インタビュー 国際協力NGO「JEN」

他人のためなら頑張れる

木山啓子 12

○運動の現場から

高校無償化と朝鮮学校

越田清和 16

6・19集会「もうやめよう！日米安保条約」

北野 誉 18

すさまじい社会から

荒井康裕 19

4・25 沖繩は黄色い意思表示

大木晴子 20

完成 DVD「どうする安保」

小林アツシ 21

○文化

新連載 反戦交友録「古屋能子さん」

吉川勇一 22

連載エッセイ⑦脆さの強さ

鈴木一誌 23

本の紹介 「他策ナカリシラ信ゼムト欲ス」

天野恵一 24

映画の紹介「ハーツ・アンド・マインズ」

本野義雄 26

マンガ ふしぎの国のありか②

まっただえこ 33

○その他

「池澤夏樹・吉川勇一講演会」のご案内

有馬保彦 15

読者懇談会の報告

27

【資料】「普天間基地問題についての第二の声明」

28

市民意見広告運動／ニュースのCD-ROM化

32

事務局だより

吉川勇一 34

6月読者懇談会のお知らせ

29 読者のおたより 30

インフォメーション

33 会計報告 35 編集後記 36

カット 村雲 司

◆題字 安西賢誠

◆6月の読者懇談会のご案内

☆ 6月の読者懇談会のご案内 ☆

・テーマ：DVD「どうする安保」上映 小林アツシさんのお話
日時：2010年6月25日（金）午後6時半 場所：ピープルス・プラン研究所（東京都文京区） 参加費：500円
※詳しくはP.29の案内をご参照下さい。

最後に

樺 美智子

だれかが私を笑っている
こつちでも向こうでも
私をあざ笑っている
でもかまわないさ
私は自分の道を行く

笑っている連中もやはり
各々の道を行くだろう
よく云うじゃないか
「最後に笑うものが
最も良く笑うものだ」と

でも私は
いつまでも笑わないだろう
いつまでも笑えないだろう
それでいいのだ

ただ許されるものなら
最後に
人知れずほほえみたいものだ

(樺美智子遺稿集「人しれず微笑まん」)

●作者プロフィール

かんば・みちこ 1937年11月8日東京都生まれ。1957年
東京大学文科入学。同大文学部学友会副委員長として安保闘争に参加。
1960年6月15日の安保反対国会デモ中、国会南通用門にて警官隊と
激突して死亡。享年22歳。

特集1 日米安保を 問い直す

「日米安保改定50年」の今、日本政府はこれからも米軍に基地を「提供」し続けるのか、「海兵隊」はなぜ必要なのか。
「日米安保」を私たちの手で変えるにはどのようにすべきか、その端緒を探ります。

沖縄の心を国民の意思に

伊藤 千尋



■日本人はよそ者扱い

この3年、毎年沖縄に行っている。沖縄の上空に達するはるか前に、飛行機は異常な低空飛行に入る。海の上空わずか300メートル以下だ。

飛行機にとって安全なのは高度1万メートルで飛ぶことだ。しかし、沖縄近辺の上空は米軍の占有空域で、民間機は300メートルより高いところを飛べない。日本の空であって、日本のものではないのだ。

操縦士も大変だが、乗客も怖い。機内から話し声が失せる。こんなに低空を飛び続けて大丈夫なのかと、みんな心配なのだ。

空だけではない。沖縄に着いて那覇から北を目指すには高速の沖縄自動車道を走るが、道の両側には金網が張られている。その向こうは基地だ。金網の上部には道の内側に向かって鉄柵が伸びる。市民が基地に入れないようにしているのだ。この島では空も陸も日本人

がよそ者扱いなのである。

自動車道は普天間基地さらに嘉手納基地と続く。基地のそばには学校や住宅地がある。基地と一般の住宅がこれほど密着しているのは、世界でもあまり例がない。嘉手納の飛行場ではF16戦闘機2機が轟音を上げて飛び立った。私が訪れたのは土曜だったが、平日は3分おきに戦闘機が離陸するという。そのたびに住宅地にも学校にも、耳をつんざくような音がとどろく。

基地の中には空中警戒管制機、空中給油機など計100機が常駐している。最新型の黒いF22型戦闘機も見える。1機180億円もする金食い虫だ。

さらに北上すると辺野古だ。浜辺に鉄条網が張られている。その先は弾薬庫だ。鉄条網には市民の手で「NO BASE」などと書かれた赤や黄色のリボンがつけられていた。基地に反対する住民たちは小屋を建てて座り込んでいた。

■世界に広がる9条の精神

再び南下し西に走ると読谷村だ。太平洋戦争末期の沖縄戦のさい、沖縄本島最初の米軍上陸地となった地である。この村だけで3700人以上が亡くなった。

村の役場のすぐ側に運動公園がある。4月25日に普天間飛行場の早期閉鎖を求める県民大会が開かれた場所だ。その日、9万人の市民が集まった。女子高校生2人が壇上で「ここは日本なのか。みんな基地は仕方ないとあきらめていないか。考え直そう」と訴えた。

この公園の一角に「人類の未来は常に明るいものでなければならぬ」と刻んだ「不戦の誓い」の石碑が立つ。二度と戦争を起こさせないという決意を表明した「不戦宣言」の碑もある。

読谷村役場の玄関のそばには日本国憲法第9条を記した記念碑が立っていた。柱の上に炎が燃えさかる彫刻があり、柱に9条の条文が掲げられている。なぜ、それが建てられたのか。私は役場に入って聞いた。

9条の碑も、不戦宣言の碑も、沖縄戦の終結50周年を記念して1995年に建てられたという。当時の文書にはこう書かれている。「世



キャンブ・シュワブ正門前の座り込み (2010年4月)

界中が九条の精神で満ちることを信じよう」

日本でさえ自衛隊がこれだけ肥大化して9条が実現されていないのだから世界中が9条の精神で満ちるなんて信じられない、と言われるかもしれない。だが、9条は事実として世界に広がっている。

アフリカ沖にあるカナリア諸島には日本国憲法9条の記念碑がある。グラン・カナリア島のテルデ市の「ヒロシマ・ナガサキ広場」の中だ。白いタイルに青くスペイン語で日本国憲法9条が書かれている。

碑ができたのは1996年だ。テルデ市と空港を結ぶバス道路を作ろうとしたときにできた空き地を、「市民が平和を考える広場にし

よう」と当時の市長が考えた。

大西洋の島にも9条の碑があるのなら、私たちの知らない地球上の別の場所にもあるのではないか。私たちは9条が日本人だけのものと思っているが、今や9条は平和を願う世界の人のものになった。碑を見つめながら、私はそう思った。

■米軍基地は世界から消えつつある

20世紀は戦争の世紀だったというが、その後半には平和への努力が進んだ。ベルリンの壁が崩壊しソ連が消滅し、冷戦が終わってからは急速に平和に向かっている。沖縄の基地をどこに移すかが問題になったが、実は世界から基地が消えているのだ。

米軍のアジアにおける最大の基地だったフィリピンのクラーク空軍基地は1991年に、スービック海軍基地は92年に、いずれもなくなった。きっかけは91年の火山の噴火だ。逃げようとした人々に対して基地は門を閉ざした。これが問題になった。「米軍基地はフィリピン人の命を守るためにある」と説明されていたが、現実には守らなかつた。だれのために基地はあるのか、と根本的なことが問われたのだ。

アメリカとフィリピンには日米安保条約に似た安保条約が結ばれており、10年ごとに見直



すことになっていった。ちょうどそのときに条約の更改期で、国民の命を守らない基地はいらないと国会は基地返還を決議した。その結果、1年後に基地がなくなったのだ。このとき、基地をどこに移すかをフィリピン側が議論したわけではない。「いらない」と言うだけだった。ただ一つ問題となったのは基地労働者の生活だ。当時、4万2千人が働いていた。その家族を含めると30万人が基地で暮らしていた。基地に隣接するオロンゴポ市のNPOの提案で基地の跡地利用の計画が決まり、それに沿って開発を進めた。5年後に私が現地に行くと、海外からの企業が入り農業利用も進み、かつて基地だった場所で6万7千人が働いていた。基地当時の1.5倍だ。軍事でなく平和な仕事に就けて、労働者は喜んでいった。

基地はアメリカ本土からも消えている。サンフランシスコにあった米陸軍最大の基地フォートメイソンが廃止されたのは、沖縄が日本に復帰した1972年だ。2000年間も使われた基地で、太平洋戦争のさいは150万の米兵を対日戦争に送った。市民の案をもとに1977年、基地は市民活動センターとして生まれ変わった。

建物は安い費用で市民団体に貸された。いま行くと、かつての将校の部屋がNPOの事務所となっている。埠頭のかまぼこ型の倉庫は、劇場となった。週末になると市民の劇団や楽団が舞台

で上演する。イベントは年間1万5千件に達し、参加する市民は180万人になる。市内にサンフランシスコ・ジャイアンツの本拠地の球場があるが、そこよりも来る市民の数が多し。センターの運営も市民が行っている。

■手を取り合う中南米諸国

かつて「カリブ海の沖繩」と呼ばれたアメリカの自治州プエルトリコのビエクス島の基地も、2003年に返還された。1941年から島の3分の2が米海軍基地となり、ナパーム弾、枯れ葉剤、劣化ウラン弾など新兵器の発射実験が行われた「基地の島」だ。

島民には白血病や「ミナマタ病」、ガンの発生率が異常に高かった。1999年に誤爆で島民1人が死亡したのを機に島民による返還運動が盛り上がり、わずか4年で基地は米本土へ移ったのだ。

南米エクアドルでも2009年11月、米軍基地が撤去された。対米従属からの脱却を掲げて07年に発足したコレア政権は08年、基地協定を延長しないと米国に通告した。さらに国民投票により、外国軍の基地の設置を禁止する新憲法が承認されたのだ。

基地撤去の運動をした市民によると、まず基地の実態を知らせるプロモーション



4.25 集会で

ン・ビデオをつくって広めることから始めたという。軽やかな音楽に乗って軽やかに主張する点が、日本の運動と違う。

運動の中心になった団体の一つに「オリガミスタ」がある。スペイン語で「折り紙をする人」という意味だ。彼らは日本人から習った折り紙に独自の工夫をこらした。折り紙を初めて見る人に、白血病で亡くなる直前まで千羽鶴を折った広島の少女「サダコ」の物語を語りながら鶴を折ってみせる。日本発祥の伝統文化を、平和を広める運動につなげているのだ。

中南米はかつて「アメリカの裏庭」と呼ばれ、政治も経済も米国一辺倒だった。今や、米国と距離を置き独自の国造りを進めるようになってきた。

それが可能になったのは、これまで対立していた南米諸国が手を取り合うようになったからだ。経済での結びつきを強め、米国に頼らなくても仲間同士でやっていくようにした。欧州共同体のような組織を南米につくったのだ。

アジアで言うなら、日本と中国や韓国あるいは北朝鮮、台湾、ベトナムまでも含んだ共同体をつくったようなものである。そんなことは無理だと言うかもしれないが、南米諸国同士のかつての対立はもつとすさまじかった。中南米の小国コスタリカは日本と同じく平和憲法を持っている。しかし、日本と違って

本場に軍隊をなくした。周囲の3つの国が内戦をしていた時代、この国のアリアス大統領は対話を説いて戦争を終わらせ、1987年度ノーベル平和賞を受賞した。

沖繩・読谷村の沖繩戦終結50周年の記念誌のあとがきに、アリアス氏の発言が出てくる。「最も良い防衛手段は、防衛手段を持たないことだ」という言葉だ。

このあとがきでは日米安保の見直しを主張した。結論で言う。「われわれが欲しているのは、平和憲法と人間尊重を基調とする新たな外交政策であり、憲法第9条の示した非軍事国家なのである」と。

「基地はいらない」という声は、沖繩から徳之島に広がった。今こそ、その理念を日本全国に広げるときだ。

いとう・ちひろ 1949年山口県生まれ。74年朝日新聞に入社し、東京本社外報部を経て、サンパウロ支局長、バルセロナ支局長、ロサンゼルス支局長など中南米、欧州、米国外派員を歴任。現在、「be」編集部員。ほかに「コスタリカ平和の会」共同代表。著書に「二人の声が世界を変えた」（新日本出版社）、「反米大陸」（集英社）、「活憲の時代—コスタリカから9条へ」（シネフロント社）、「君の星は輝いているか—世界を駆ける特派員の映画ルポ」（同）、「世界一周、元気な市民力」（大月書店）、「観光コースでないベトナム」（高文研）、「たまたか」新聞「ハンギョレ」の12年」（岩波書店）、「太陽の汗、月の涙」（すずさわ書店）など。

（写真提供 大木 晴子）

基地の街 立川・砂川から見た安保

加藤 克子



1 『基地日本』から遠く離れて

今年の立川憲法集會は、沖繩から高里鈴代さんを招いた。高里さんは講演の冒頭、「沖繩と本土の間には暗くて深い溝がある」という言葉を投げかけた。かつて全国の問題として認識され『基地日本』と表現された基地問題が、今では『基地沖繩』という表現がびったりくる現実を高里さんは突いたのだと思う。「沖繩

本」の一角を担っていた。朝鮮の戦場から帰休米兵が持ちかえる戦場の雰囲気や町を包み、多いときは5千人におよぶ若い女性たちの売春が彼らの落とすドルを吸収し、基地経済を潤していた。いまその記憶はほとんど忘れ去られている。

沖繩返還の年、立川に自衛隊がやってきた。やがて米軍は横田基地に集約化されていった。米軍基地跡地はほぼ3分割され、西が昭和天皇在位50年を記念する「昭和記念公園」になった。有事の際、ここに全国から兵員・物資が集まってくる予定だ。東が自衛隊立川基地を中心とした「広域防災基地」になった。有事の際、首都機能を代替える主要な拠点になる。残りの「保留地」と呼ばれる地域には、続々と自治大学校、裁判所、拘留所、各種研究機関など国の施設が建設された。わずかに残った保留地に地元立川市の給食センターなどが建設される予定だ。

2 自衛隊基地を通して見る日米安保

72年、自衛隊を迎えた立川は、一種の戸惑いを感じていた。「基地拡張は阻止され、砂川闘争は勝利のうちに終わった」という認識が

砂川の反対同盟でも一般的だった。それでも自衛隊を迎えた基地ゲート前の抗議行動には、数々の裁判を担い続けた副行動隊長の宮岡政雄さんが、白い鳩を染め抜いた反対同盟の赤旗を持ってかけつけていた。他国の軍隊による占領と支配が終わり、自国の軍隊が進駐してくる—日本の軍隊—自衛隊を実際に目の前にして感じたたじろぎは、まるで身の内に親戚の若者を抱え込んだ感覚、とでも表現すべきだろうか？ テント村の闘いはここから始まった。

私たちは小西誠三曹の「アンチアンボ」にならって自衛官にむけた反軍放送やビラ配りを始めた。テント村の小屋が放火で焼失した数ヵ月後には基地正門前で宣伝カーからの反軍放送を再開し、最初の放送特集は「沖繩問題」だった。基地の監視、反基地・反戦のデモや情宣を継続すること、その一方で自国の軍隊に対する闘いの思想を深めることが私たちの基本的な活動になっていった。以後38年間、曲がりなりにもテント村の活動が継続できているのは、軍事基地・自衛隊・日米安保という巨大な存在が相手であったこと、そして立川基地北側に歴史的な砂川闘争の地があったことと無関係ではない。

重要な側面を3点紹介しよう。

(1) 「むかし国防 いま防災」

古くなったこの標語は、防災イデオロギ―



定例駅頭情宣のあと、立川基地に申し入れ

返還」から始まった在日米軍基地の沖繩への集約化は、いま「普天間の移設先は沖繩しかない」という鳩山発言で、究極のところまで煮詰まっている。

かつて立川は『基地日